

特集 「古典学の再構築・ 第1回公開シンポジウム」報告

「古典諸学の歴史・現状・未来」

日本学の歴史・現状・未来

木田 章義

日本学に於ける古典

日本分野というのは、他の分野とは事情がかなり異なる。研究者の数も多く、研究分野も広く、しかも細分化されている。日本学の現状一つをとっても、とても概説することはできない程の広がりがある。しかも、社会に対する情報提供も盛んであり、開かれた研究分野と言えるであろう。

この特定領域で扱う古典というのは、パンフレットに書かれているように、中世以前のもので、「人間と世界に関する精選された知識の集成」されたものであるが(p. 6)、このような定義に合う古典を日本の中で探すのはなかなか困難である。

日本において古典というのはどういうものを指すのかという点については、さまざまな意見があることであろう。いろんな意見があるということを承知の上で、この重点領域の中で、研究対象とする範囲を考えて置かねばならない。

具体的に日本における古典となると、多くのものが考えられる。

まず、「歴史学」であるが、この分野には、他の分野と同じように膨大な数の資料がある。古いものでは『日本書紀』や『古事記』などが挙げられる。『日本書紀』や『古事記』の場合には一つの世界観をもっているが、これが果たして日本の文化の根底にあたり、現代にま

で流れる思想を内在しているかということになると、断言は難しい。それ以降にも『続日本紀』『文徳実録』などの記録、貴族の日記などさまざまな資料があり、それらが「人間と世界に関する精選された知識の集成」という概念に当たるかと言えば、やはり疑問となるだろう。しかし短くともその時代の意識や価値観を反映しているということに注目すれば、「古典」の枠の中に入れることができるだろう。「社会学」などでも利用されることの多い「武家の家法」などもあるが、それらもある時期の日本人の思考方法を物語るといふ面からみると、一種の古典と呼んでも良いであろう。

このような世界観なり人生観というものがよく現れているのは、実は、それらの歴史資料から作り上げられた歴史物語・軍記物語ではないかと思う。これらの物語は、断片的な歴史資料のエキスを、連続した形で、身近なものとして描いたもので、諸行無常・盛者必滅の諦観、主君のために命を捧げる武士、摂関家を中心とした権力の推移の物語など、当時の人々が興味を抱き、周囲の世界をどのように捉えていたかを物語る。歴史の流れから見れば断片的である歴史資料をつなげているのは、それぞれの時代を反映しつつ、連続して行く「文学」ではないだろうか。

「宗教学」では、仏教学と神道学が中心となるであろう。奈良時代から平安時代にかけて、漢文訳の經典の理解に努力していた時代から、新しい仏教が起こり、その教義の根幹を定める著作が編まれた。それらの經典も読まれたのは確かであるが、それらのエキスを体現しているのは、教義を物語の中で理解させようとした、仏教説話の方ではないだろうか。教義が骨であるならば、説話は肉に当たるだろう。教義が厳密であればあるほど、それは一般には受け入れがたく、説話のレベルで理解され

たとすると、仏教説話のもつ力は大きい。神道の場合は仏教との習合などの問題があり、さまざまな思想の影響を受けつつ体系を作り上げて行く中で、日本人の心性や価値観などを取り入れていったが、その教えが日本人の意識の根幹になったとは言えないだろう。神道説話が仏教説話と同じ働きをしていたかについては、明瞭ではないが、考慮すべき問題であろう。

「芸能」の分野でも古典と称すべきものはあるが、それらは文学の中に含めて考えられることが多い。

さて「文学」の面から考えると、その来源を見れば、それが宗教であれ、軍記であれ、政治であれ、芸能であれ、ある時代において、多くの人間が興味を持ったもの、そういうものからは「文学」と称することのできるものが流れ出ていることが分かる。教義や思想が存在していても、それらが日本人の思想や哲学の根本になったということは少ないようで、それらの思想・哲学を、日常生活のレベルで理解するという方向、つまり物語や和歌・連歌などを通じてそのエキスを理解し、それを生活の指針とするということが盛んであったと言う方がふさわしいのではないか。つまり、日本における古典の代表は、文学と呼ばれる範疇に入るものが中心であって、我々が日本古典と言え、ば、「文学」を想起するしかないのは、そういう日本人の人生理解の方法に依るのではないか。そして日本における古典というのは、「人間と世界に関する精選された知識の集成」という定義ではなく、「日本人の心性を築き上げてきたもの」という定義の方がふさわしいと思える。

具体的に考えると、日本における最古の古典は、『万葉集』ということになろう。そこでは、様々な身分、時代の人々の日常的な感覚や政治的な思想などが描かれているが、『万葉集』全体を統括するような世界がある訳ではない。しかし日本的発想や思考方法が見られる。漢詩集『懐風藻』などの場合には、その言語もその形式も中国のものが規範となっているので、これらに収められた漢詩は、日本人の心性を直接表現しているとは言い難いのであるが、そこに日本的な表現や題材がある以上、まったく日本人の心性を表現していないとは言えないであろう。

平安時代になれば、『古今集』を初めとする和歌集、『源氏物語』を代表とする物語、『日本霊異記』などの仏教説話、漢詩集である『凌雲集』『文華秀麗集』など多くのものがあるが、これらも日本的な心性を育んできている。『新撰姓氏録』などの資料も、当時の人々の秩序意識や価値観などを知る上に重要なものであるし、『和名類聚抄』のような辞書類も、当時の人々の知識の基礎や常識、つまり彼らの持っていた世界観を知る上で重要な

ものであり、古典と見ることができであろう。

日本人の心性を築き上げてきたものという定義をすると、これまでは古典とという概念に入らなかった辞書類までも古典に入ってくる。この重点領域では、このような形で日本の古典を位置づけておこうと思う。

日本に於ける「古典学の歴史」

古典研究の意識的な試みとしては、天曆五(951)年に、村上天皇が、当時では読めない部分があったらしい『万葉集』に対して、「梨壺の五人」(大中臣能宣、清原元輔、源順、紀時文、坂上望城)に命じて、点を付けさせたというが、これが文献に現れた最初の出来事であろう。それ以前に、清原夏野を総裁として養老令の注釈をして、『令義解』という書を編んだが、これも古典研究と言えるかもしれない。

奈良・平安時代の古典の研究と言うのは、公家と僧侶の手によってなされているが、その研究の対象は、『万葉集』の附訓を除けば、漢文文献であった。この傾向は一貫して存在しつづけ、明治時代に至る。この傾向が実は日本の古典の定義を複雑にした原因である。誤解を恐れずに言えば、日本に於て「人間と世界に関する精選された知識の集成」という定義に合った古典は、実は中国古典であったということもできるのである。

日本人の著作の中で、一定の評価を受けて、古典と見なされるものが出現すると、それらを研究する著作も現れる。『源氏物語』の注釈は平安時代末期から行われるようになっていたし(『源氏釈』)、この流れは室町時代の四辻善成の『河海抄』のような大きな注釈書に受け継がれていった。『日本書紀』の注釈書である『釈日本紀』が卜部懐賢によって編まれたのが、鎌倉末期であり、それ以前から書紀研究が行われていたことが窺える。『日本書紀』の場合には、『日本書紀』完成直後に講筵が行われたと言われているので、まとまった文献として残っていないが、『日本書紀』の研究が行われていたことが分かる。ただし、この場合には、おそらくまだ「古典」という意識はなく、日本の歴史を太政官に学ばせるということが目的であったと考えて良いであろうから、古典研究とは言い難いかもしれない。

こういう古典研究の中で特筆すべきは藤原定家である。定家は自家に蔵した様々な古文書を調査し、古写本の書写をし、本文を校訂しており、古典研究のなかで、大きな役割を果たしている。そして、古典研究の大きなピークとなるのは、江戸時代の、契沖や宣長を代表とする国学者たちの仕事である。それらの業績を背景にして、欧米の新しい手法を取り入れ、明治から現代へとつながってゆく。

外国文化との接触に限定すること

以上のように、日本における日本分野というのは巾が広く、研究の肌理も細かく、その全体を対象とするならば、この特定領域全体を利用しても、まだ足りないということになる。従って何らかの制限を加える必要がある。他の分野との連関ということを見ると、外国文化との接触という方向が考えられる。

外国文化との接触と言え、日本が文献時代に入った時からすでに中国文化・朝鮮文化の影響を受けており、文献時代以降のすべての時代が対象になりうるが、ここでは、大まかに三つの時期に分けておく。

第一の時代は、文献時代以降、遣唐使の廃止されるまでの中国文化の直接の影響のある時代とそれを消化吸収する時代、次は、鎌倉・室町時代の、五山文化と呼ばれる禅宗を中心とした中国文化の影響の時代、次は、室町時代のヨーロッパ文化、とくにキリシタン文化の影響の時代である。第一の時期の、中国文化の影響については、この20年の間に、優秀な研究者が輩出し、研究がかなり進んでいる。研究分野も細分化されて、かなり成熟した分野となっている。ところが五山文化とキリシタン文化については、研究人口も少なく、研究成果も多いとは言えない。まだ、資料の整理さえ終わっていない部分を残している。そこで、このような特定領域研究が充足する以上は、文献時代以降の時間の流れの中で、大きく欠落しているこの二つの分野を補うことによって、日本の歴史、文学の歴史、宗教の歴史の灰色の部分に光を当てるべきであろうと考え、この二つの分野を、特に重視するという方針をとった。

古典学の将来とコンピューター

日本分野では、基礎的研究が一段落すると、研究論文の数が少なくなり、その数少ない論文も評論的なものになりがちになる。口語訳がたくさん出版されると、原典を原文で読まずに済ませる傾向も出てきて、読解力のない研究者も多くなっていく。総じて言えば、古典の研究者の数が少なくなり、実力の低下が見られる。これは、世界中で共通している現象らしく、古典学の風化とか古典学の変質と呼んで良いであろう。こういう危機感は、この特定領域研究の発足の理由の一つでもあった。

古典学というのは、これまではある意味では職人芸に頼っていた部分が大きかった。一人の研究者が研究対象とする文献の索引を作り、分析するというやり方でやってきたが、コンピューターによって多くの文献がテキスト化され、それが共有されつつある現在では、そういう職人芸が通用する範囲がかなり限られてくるようになっ

た。テキスト化された多くの文献は、パソコンによって、数秒で一気に検索され、これまで用例探しに費やしていた時間が不要無くなりつつある。これによって、他の分野の調査、異なった視点から考察する時間的余裕ができるはずであるが、そういう成果を得る前に、文献のテキスト化という大作業が残っている。テキスト化するためには、どの本を底本とするかという問題、異本をどのようにするかという問題、そしてテキスト化した後の校訂作業も重要な大作業である。もちろん外字の処理など、この特定領域研究の「A03 情報処理」の扱う問題があり、この「A03」の担う責任はきわめて重要である。

大量のデータを短時間で検索することができる状況になったときには、注意して置かなければならないことがある。それは、電子テキスト化された後は、そのテキスト化の際に考慮された様々な問題が捨象されてしまい、すべての文章が対等の重みを持つように錯覚しがちで、逆に、研究が浅くなってしまふという懸念があることである。つまり、索引や電子テキストを利用した研究では、章や巻による相違、異文の処理、写本の違いなどが無視されがちで、用例は集めるけれども、それらの用例の背景までは考察されず、すべてが同じ重みで利用されるようになりがちで、これまでの職人芸の部分が欠落したまま、資料を平板な均質的なものとして利用してしまふ傾向が生じやすいという訳である。コンピューターに入力されたテキストに、テキスト以外の情報をどれだけ入れることができるのかということ、もしくはテキストにどういう附載資料を付けることができるのかということが、これからの課題になろう。

中国における古典意識の成立

興膳 宏

中国の古典の歴史はきわめて長い時間にわたりますので、ここでは古典の意識が確立された初期の段階に焦点を絞りながら、特徴的な問題点をお話したいと思います。

中国の典籍は少なくとも前漢末以来、国家的な事業として、管理・保存が継続的になされてきましたが、その直接の源流は西暦紀元前二世紀の漢の武帝の時代に始ま